

日の光を浴びて

(一) 水野仙子

日は照れど、日は照れど
君を見る日の來なければ
わたしの心はいつも夜

日は照れど、日は照れど
わたしは目盲ひ、耳聾ひ、啞者
君を見もせず、聞きも得ず

「日が照つてゐる……。」

さう眩つぶやきながら、私は部屋の隅から枕を巡めぐらして、明るい障子の方にその面おもてを向けた。南向きといふ事は何といふ幸福な事であらう、それは冬の滋養じやうを大半領有する。日の光は今頑固かたくな朝の心を解いて、その晴やかな笑顔のうちに何物をも引きずり込まないでは置かないやうに、こゝを開けよとばかり閉ぢられた障子の外を輝きをもつて打つてゐる。

私はそれに従はないではゐられなかつた。手をのべて、しかしなか／＼届きさうもなかつたので半身を乗り出して、それでも駄目だつたのでたうとう起き上がつてまで、障子を左右に開いた。日光は柔やはらかに導かれ、流れた。その光が

漸く蒲團ふとんの端はしだけに觸れるのを見ると、私は跣かんでその寢床を日光の眞中に置くやうに引いた。それだけの運動で、私の息ははづみ、頬に血がのぼつた。そして暫く枕についてからも鼓動こどうが納らなかつた。

「日が照つてゐる……。」

それはほんたうに幸福な事である。けれども……鼓動が全く静まつて、血の流れがもとのゆるやかさにかへつた頃、極めて静かに歩み寄つて來るもの侘びしさを、私は心に迎へなければならなかつた……それは力の弱い冬の日だからだらうか？ 否いや！ どうして彼女の力を侮あなどる事が出來よう。お聞きでないかあのもの静かな寛かけひの音を見る通りに雪は眞白く山に積つてゐる。そして日蔭ひかげはあらゆるものの休止の姿で静かに寒く黙りかへつてゐる。それなのに同じ雪を戴いたいたこゝの底ひさしは、彼女にその冷え切つた心を温められて、今は惜しげもなく愛の雫しづくを滴したらしてゐるのだ。

【入力者注】

底本は総ルビですが、ふりがなは一部のみ残しました。

底本に行を合わせるため、半角スペースを挿入した箇所があります。

底本…讀賣新聞

大正八(1919)年二月六日朝刊

テキスト入力…小林 徹

公開…平成二十九年十二月十日

改訂…令和七年八月十八日

リンク…[水野仙子作品年譜](#)